
幻

j u n .

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻

【コード】

N0443N

【作者名】

jun.

【あらすじ】

いまのままではいられない

今はきつと終わる

いまのままがいい……。

そう思ってしまうのだから俺はずるい。

神様！？はいるかいらないか？自分自身信じているか信じていないか？もしいるなら聞いてみたい事がある。

いまのままがいい。他に何もいらないこのままがいい。でもこの先何も変わらなず過ごせる訳はない。それならこの後、どんな変化を受け入れなくてはいけないのか知りたい。受け入れたくない事実かもしれない。でも、突然直面するより気持ちの準備ができていた方がずっといい。だから教えて欲しい。

俺の趣味は山登り。今日も容子と大樹と夏で高尾山にきた。大樹は小学6年生で山登りは3度目。彼は向いている。ただひたすら任務を遂行するかの様にもくもくと歩く。男らしい。彼は息子ながら感心するし見習わなくてはと思う面が多々あるのだ。夏は小学2年生で山登りは初めて。今日の高尾山も山登りとは到底言えない。天気もいいし行ってみようと容子が言いだし、遠足気分で作ってきた。サンダルできてしまったくらいだから。夏はお姫様のように、だっこだのおんぶだのわがママを言っている。彼女は甘え方を知っている。その上“パパはイヤ”など既に父親嫌いは始まっているのかママ大好きのようにだ。俺は兄が1人いて次男。女性は母親しか家族にいなかった。娘と言えど踏み越えられない何かがある。容子と昔の様にテントをもって静かに山を登りたい。久しぶりにそう思った。

容子とは大学の登山サークルで出会ったのがきつかけ。一つ年下だ

が、俺は一浪してるので学年は一緒。とてもかわいい人だった。意思は強くしっかりしていて物静かで、でも存在感がある。年下とは思えない安心感を持っている人。なんだかんだともう結婚して14年。。経済的にも大変な時期もあったけれど自分も容子も、自分たちさえ若いはずなのに子どもを持ち家庭を作り、一人とは違う幸せだと思える生活を送ってきたのだ。そしてこれからもいまのまま……。

佳代は今何をしてるだろう。

今日は何回メールの問い合わせをしただろうか。高尾山でも電波が悪いせいでメールが届かないのかと思い、何回も新着問い合わせをした。携帯電話も休暇をとっているかのように静かな1日だ。

今日はパパになる日。佳代はそう思っている。音沙汰なし。確かに今日はパパであり夫であった。佳代の事は忘れていた。…訳ではないが、別の世界にそっとおいておいた。男は脳の構造的にそれが可能だ。女はきつと別世界にはできないはず。だから演じるしかなくなるのだろう。その点、男は演じる訳ではなくパパとなり夫になれる。そして役目を果し、自分の世界に佳代を再び連れてくる。そして1日メールがなかった事、連絡がこない事実を実感し存在を確かめたくなり、おやすみとメールしてみる。眠るまでパパであり夫であればいいものを最後の最後に佳代を同じ世界に連れてきてしまう。そしてメールがくれば幸せに1日を終え、こなければ寂しくその日を終える。何をして、どんな1日を過ごしていても布団で待つ佳代のメールにかかっているなんて、それでいいのだろうか俺は。

佳代。それは結婚したあとに出会ってしまった運命の人。俺はそう思っている。全てが全て順番通りには行かないはずだ。少なくとも

俺はそうだったのだから仕方ない。と言い聞かせながら。コの字の積み木がびったり重なったかの様に違和感なく佳代を必要と思うようにいつからかなってしまった。“いい女と言われたい”という女。年齢は下だが彼女と一緒に過ごす上で歳はあまり関係ない気がする。男っぽい所がある反面、めっちゃくちゃ女っぽい所もありまだ分からない所ばかりだ。不思議な女。いつになっても開けてないまだ見ていない引き出しがあるようだ。彼女はわざとそうしているし、自然にそうなっている。だから手離せないのだろうか。

男と女。俺が考えているのと同じように思っていてくれれば何の心配もない。俺は夜のメールで幸せに包まれ眠り、朝目覚めても幸せは続いている。すっかり佳代もそうだと思っていると、突然別れ話が舞い込んできたりするから分からない。身も裂ける思いで佳代のためならと生きた心地もしないまま受け入れようとすれば、怒りだす。女はわからん。さっぱりわからん。結局、もつと愛して欲しい時に究極の手段を使う生き物なのだほんの少しだけわかった気がする。女と男。それは思考や結果の導き方、全てが違い分からないから興味をもつものなのだきつと。

佳代は真正面からぶつかってくる。激しく体当たってくる。痛ければ泣き喚き優しく包めば満面の笑みで逆に俺は包れる。こんなに分かりやすく、激しい人は俺の周りにはいなかった。扱いが分からない。それが正直初めに彼女へ抱いた感想だ。

大樹。俺のDNAを分けた息子。サッカー少年。半端でない集中力を持っている。勉強はしないし、宿題などは要領よくある意味ずるくこなしているけど、何の心配もない親バカのようだが、よく出来た息子だ。俺はすっかり男として彼を頼りにしている。万が一、俺に何かあったとしても容子や夏を託せると言っても過言でないだろう。彼が4年生の頃、山形にある山寺に行った。弱音も吐かずゆっ

くり自分のペースで登り切ったのだ。その頃からだったか男らしさを感じ、安心してみられると一目置くようになったのは。

容子の得意料理はロールキャベツ。細かい仕事が嫌いではないように、決して煮崩れる事はない。しっかり巻かれている。胡椒がきいていて美味しい。丁寧に時間をかけて作った料理と言うのが感じとれて安心する。彼女は山仲間の運営するキャンプ場の手伝いをこの時期からしているようだ。片道、車で50分はあると思うが文句ひとつ言わず、毎日楽しんでいる。

佳代との出会いは偶然だった。

俺は実は作曲家なのだ。可愛がってくださる師匠の会社にお世話になっている。その会社へ依頼された仕事のひとつに、草津で観光協会の主催するイベントがあり、うちの会社に所属している、バイオリンの女の子とチェロの男の子が参加する事になっていたのだ。そこへ社長は行く事になっており同行したのであった。酔った勢いで曲作れーなど言い兼ねないので多少の準備もしつつ新幹線にのつたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0443n/>

幻

2010年10月15日21時13分発行